

令和元年6月19日現在

機関番号：32607

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H07076

研究課題名(和文)戦後ドイツ文学の「新たな言語」の理論と実践

研究課題名(英文)The Theory and Praxis of the "New Language" in German Post-War Literature

研究代表者

風岡 祐貴 (Kazaoka, Yuuki)

北里大学・一般教育部・講師

研究者番号：20801989

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は戦後ドイツ文学における「新しい言葉」の問題に取り組んだ。具体的にはオーストリアの作家、インゲボルク・バッハマンに焦点を絞り研究を進めた。ちなみに「新しい言葉」とはバッハマンがフランクフルト大学で行った講演で用いた単語である。しかしこの概念はバッハマンのみならず、広く戦後の作家と関係している。ナチスに濫用された言葉をどのように刷新するのが、戦後ドイツ文学の課題の一つだったからだ。本研究では、バッハマンの遺稿の分析を通して、バッハマンが強調していた戦争体験をはじめとする「苦しみの経験」と、その経験を語る手段である言葉への厳しい内省があっはじめて「新しい言葉」になりうるという結論を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果の学術的意義は以下の二点である。第一にバッハマンの遺稿研究への寄与である。バッハマンの遺稿とリわけ遺稿詩についての研究はまだ浅くこの分野の発展に貢献できた。第二にいわゆる「言語批判」に対する考察の深化である。言語批判とはドイツ語のSprachkritikの訳である。(詳しくは研究成果報告内容ファイルを参照)バッハマンとクレンペラーを比較することによって戦後ドイツ文学が問題とした「言葉に対する内省」の一面を示すことができた。次に社会的意義は、言葉の濫用の問題を提示したことである。この問題は戦後のみならず今日に続くものであり、またドイツのみならず日本にも見られる問題である。

研究成果の概要(英文)：This research treats the concept of "new language" in German post-war literature. The term "new language" goes back to Ingeborg Bachmann and is used in her five lectures on poetics known as Frankfurter Vorlesungen. In addition to focusing on this theoretical text, I also examine her poetic drafts.

In the post-war era, it was discussed how the German language had been abused by Nazis to manipulate people and how a "new language" opposed to such an abuse of the language might be possible. Bachmann argued about restarting the abused German language in her lectures and practised her ideas in her lyric drafts. This analysis above all identifies how "the experience of suffering", which Bachmann mentioned in her lectures and which means - in the first place - the experience of the war but can also include other experiences, was an essential factor for Bachmann's idea of "new language". In addition, criticism on the language itself is also necessary for the "new language".

研究分野：戦後のドイツ文学、詩

キーワード：遺稿詩 インゲボルク・バッハマン 戦後のドイツ文学

1. 研究開始当初の背景

研究代表者はこれまで戦後のドイツ文学とくに、オーストリアの作家、インゲボルク・バッハマン (Ingeborg Bachmann 1926-1973) の詩について研究を深めてきた。具体的には詩がどのように書きかえられていくのかに注目し、詩の読解を試みてきた。バッハマンの詩に限ったことではないが、ある詩が雑誌に掲載され、後に改めて詩集に収録されるとき、作者によって修正が加えられることがある。出版された後でさえ、作者が詩に手を入れることもある。また詩によっては原稿が残されていることもあり、執筆過程をたどることもできる。研究代表者は原稿などの異同を詳細に調査し詩の改稿過程を追いかける中で興味深い事実を突き止めた。それは、バッハマンが何度も「言葉」を主題に詩を書きあげようとして試行錯誤を繰り返していることだ。つまりバッハマンは言葉とは何か、言葉はどうあるべきかを詩を書くことで考え続け、その答えを模索していたのである。

バッハマンがそれほどまでに「言葉はどうあるべきか」という問題にこだわった理由はいくつかある。その一つに、戦後、ナチスによるドイツ語の濫用が批判されていたという当時の事情をあげることができる。以下に二つ例をあげる。アドルノのよく知られたテーゼ「アウシュビッツの後に詩を書くことは野蛮だ」(Theodor W. Adorno: *Kulturkritik und Gesellschaft*. In: Ders.: *Gesellschaftstheorie und Kulturkritik*. Frankfurt am Main 1975, S.46-65, hier S.65.) は、戦後、言葉はどのように用いられるべきか、深い疑問を投げかけた一文である。次にヴィクトール・クレンペラー (Victor Klemperer 1881-1960) は、『第三帝国の言葉 - ある文献学者のノート *LTI - Notizbuch eines Philologen*』(1947)において、まさしく「文献学者」の手法で、ナチスはいかにドイツ語を悪用し、その特徴はどこにあるのかを明らかにした。

アドルノやクレンペラーが行った批判は、ナチスによって貶められたドイツ語に代わる、新たな言葉の規範の確立を促していく。そして戦後に作家にはどのように言葉を新たにできるのかという課題が重くのしかかっていた。実際、バッハマンは、ナチスの用いた言葉とは異なる「新しい言葉」のあり方について語っている。なおバッハマンの「新しい言葉」についてはこの研究成果報告ファイル4の研究成果の項で詳しく触れる。

ところで、バッハマンの「新しい言葉」を考察するにあたり、気をつけなければならないことがある。それは作家のエッセイや講演などの文章と、詩や小説から読み取れる言語観が一致するとは限らないということだ。また日記や書簡に書かれたことも考慮に入れるとより複雑になる。それから作家が、ある時を境に、それまでの考えを変えることもある。バッハマンの研究においては、エッセイなどの理論的な文章はしばしば詩や小説などを解釈するために引用され、たとえばエッセイと詩において同じテーマがどのように異なって扱われているかは、なかなか注目されなかった。研究代表者はこのような問題を踏まえて、戦後のドイツ文学の底流をなす「言葉をどのように用いるべきなのか」という問題を理論と実践の両面から調査しようと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は二つである。第一の目的はバッハマンを例に取り上げながら、以下の問題を掘り下げて解明することにある。すなわち、ドイツの戦後文学が、ナチスによる言葉の濫用をどのように反省し、新たに作り替えていったのかという問題である。「新しい言葉はどのようにあるべきか」という問題は、戦後文学に不可欠なテーマである。しかし研究は進展していない。その理由はいくつか考えられるが、中でも遺稿をめぐる著作権の問題をあげることができる。また未発見の手紙もまだ数多くあると思われる。

第二の目的はドイツの戦後文学が抱えた問題を今日の問題として捉え直すことである。たとえば戦後の日本文学あるいは日本社会の知識は本研究をより深く、独創的なものにしてくれる。鶴見俊輔が発表した論文「言葉のお守りの使用法について」からは、言葉をめぐる問題が、戦後の日本でも議論されていたことがわかる。またドイツ文学ともかかわりのある中島敦のように1940年代にすでにプロパガンダに利用されていく言葉の問題に取り組んだ作家もいた。研究代表者は本研究開始以前に日本の戦後文学と言葉の問題について考察を重ねてきた。このような相対的な視点を研究代表者が持つことで、ドイツの戦後文学の問題と今日を少しでもつなげることができると思う。

3. 研究の方法

研究方法はテキストの読解が中心である。二年間を通して主な研究対象としたのはバッハマンの遺稿詩集 (Ingeborg Bachmann: *Ich weiß keine bessere Welt. Unveröffentlichte Gedichte*. Hrsg. v. Isolde Moser, Heinz Bachmann u. Christian Moser. München/Zürich 2000) であった。この詩集はバッハマンの遺族によって遺稿をもとに編纂されたものである。バッハマンの死後27年を経て出版された。遺稿を編集したという理由から、詩集といっても断片や書きつけという多数の草稿から構成されている。編者によればそれらは1962年から1964年にかけて執筆された。

この詩集を考察の対象とした理由は二つある。一つは博士論文で分析した後期の詩と関連の

深い断片が遺稿詩集には見られ、博士論文で行った研究と本研究をつなげることができるからである。

第二に「言葉」をテーマにした詩または断片がこの遺稿詩集に数多く含まれているからである。それにもかかわらず、この遺稿詩集は、伝記的側面が強いとして、解釈の対象となることが少ない。作品以前のもの、作品になりそこなったものだと見られているのだ。実際、先行研究も少なく、ラルカティとシッファーミュラーの論文集(*Ingeborg Bachmanns Gedichte aus dem Nachlass. Eine kritische Bilanz.* Hrsg. v. Arturo Larcati u. Isolde Schiffermüller. Darmstadt 2010) と学術誌に発表された何本かの論文のみである。たしかに遺稿詩とバツハマンが自ら発表した詩を同列に置くことができない。しかし遺稿詩は伝記的事実を裏付けるためにあるのではない。まして伝記的事実に還元されるものでもない。ゆえにさらなる研究を推し進める必要がある。

一年目はバツハマンの遺稿詩集の中の草稿 2454、167、311、311a を中心に調査した。その際、オーストリア国立図書館、オーストリア文学館、ウィーン大学図書館でバツハマンの遺稿や二次文献などの調査を行った。またオーストリアの研究者との意見交換も行った。さらに研究成果の一部をウルムで発表した折にもドイツの研究者からフィードバックを得た。(研究成果の項を参照) このような議論も文学研究の重要な手段である。

二年目は一年目で取り上げた 2454、167、311、311a についてオーストリアの研究者との議論から得たことを生かし、自らの読解をより批判的に見直した。その上で草稿 355、5230、5233 の解釈を試みた。

以上の遺稿詩集の精読に加えて、バツハマンが 1959 年から 1960 年にかけてフランクフルト大学で行った五回の講義の分析を、二年間を通して行った。具体的にはバツハマンの言葉に対する考え方が顕著に表されている箇所注目し上記の遺稿詩集との関連を探った。すでに「研究成果の概要」で言及したが、バツハマンはフランクフルト大学に招かれ 1959 年から 1960 年にかけて五回、同時代の文学について講義を行った。この講義は「フランクフルト講義」と呼ばれている。「フランクフルト講義」については「研究成果」の項でもふたたび取り上げ説明する。

さらに遺稿詩集と「フランクフルト講義」に加えて、バツハマンの同時代人で恋愛関係にもあったパウル・ツェランの詩についても少しずつ解釈を進め研究会で発表し、バツハマンの遺稿の分析にも役立てた。これについてはすでに一昨年、昨年の実績報告書でも触れた通りである。

4. 研究成果

本研究によって得られた知見は二つある。第一の知見は「研究成果の概要」でも簡単に紹介した。すなわち「バツハマンが目指した『新しい言葉』は言葉によって表現される対象はもとより、言葉への深い内省があってはじめて成り立つ」ということである。本研究はフランクフルト講義の中でも特に同時代の詩と「苦しみの経験」をバツハマンが結びつけている箇所に注目した。「苦しみの経験」とはここでは主に戦争体験を指すと考えられる。しかし 1962 年以降の遺稿詩でバツハマンが書き綴ったのは、戦争体験だけではなく、より個人的な嘆きや痛みの描写である。遺稿で扱われる「痛み」とは主に語り手の失恋から発したものが多く、バツハマンの「新しい言葉」の持つ意味はこの遺稿詩の中でより広がりを持ったといえる。研究代表者は遺稿 344、2454、167、311、311a、5230、5233、355 を例に取り上げ、バツハマンの「新しい言葉」が苦しみの経験から生み出されるものならば、具体的にどのような語彙がその経験を表現するために用いられているのかを分析した。そして分析の過程でモルヒネのような薬、メスのような医療器具、人体の臓器の名称、そして患者、医師や看護婦といった医学に関連する語彙が特徴的に用いられていることを明らかにした。たとえば「モルヒネ」と「恩寵」という二語を結合しオクシモロンを作り出していたり、臓器の一つである「皮質脊髄路」は字義通りの意味を意識させるように用いられていたり、ドイツ語の「看護婦」という単語の意味が「看護婦」だけでなく「修道女」そして「同胞」といったように何重にもなるように工夫されていた。今あげた三つの例からもわかるように医学に関連する言葉が、遺稿では創造的に扱われている。つまり単なる用語以上の意味を持つのである。

研究代表者は遺稿 344 にバツハマンの「新たな言葉」の実践を見出し、考察をまとめ、研究発表、論文執筆を行った。その後研究代表者は、バツハマンの遺稿には失恋や病、苦痛の描写と並び、言葉を主題にした草稿が目立つことに注目した。「失恋」と「苦痛」という二つの要素は互いに結び付けられて連想することができるが、たとえば「苦痛」と「言葉」という二つの主題の関係を探ることは難しいようにみえる。しかしバツハマンが苦痛を表現するための手段である言葉に批判的な目を向けていたとしたら、「苦痛」と「言葉」を関連づけることができるのではないかと研究代表者は考えた。つまり、バツハマンは自らの用いる言葉を反省し常に言葉はどれだけのことを表現しうるのかを、詩を書く中で疑っているのである。バツハマンの創作態度は、「研究成果の概要」でも触れた「言語批判」という平板な概念でまとめることもできるが、バツハマンの出発点はより生々しいものである。というのも、たとえばしばしば研究で引用される遺稿 437 を見れば明らかのように、語り手はそこで苦しみを言葉で表現することの限界に突き当たっているからである。文学史で語られるような観念的な言語批判とはかけ離れ

ている。

第二の知見として修辞技法としての反復の効果である。ここで言う反復とはある決まった語句や文を繰り返し用いる修辞である。しかし一口に反復と言っても、繰り返される語句や文の長短によって期待される効果は異なる。さらに同一の表現が繰り返されるのか、それとも反復されるたびに少しずつ表現に変化が加えられるのかという点にも注目すべきである。それからある語句や文が一定の間隔を置いて、あるいは間を置かずに反復されるのかも、反復を分析する上で重要な観点である。そして最後に、たとえば劇中あるいは小説において、ある表現が反復される場合、同一の人物が特定の言葉を繰り返すのか、あるいは複数の人物が同じ言葉を繰り返すのかによって様々な効果が生まれる。

以上が、研究代表者が反復技法について議論するうえでとりわけ重視している論点である。そして研究代表者は、科研費による本研究を遂行する以前に修辞技法としての反復がどのようにインゲボルク・バッハマンの詩に現れるのかを調べ、その成果の一部は論文として実を結んだ。詩『猶予されたとき *Die gestundete Zeit*』を扱った論文の中で研究代表者は、バッハマンの詩で用いられる反復は、作品の中を流れる時間が切迫していることを暗示しているのではないかと指摘した。しかし本研究計画で研究を進める中で、反復という技法をより同時代の文脈と結びつけて考えることはできないだろうかというヒントを得た。同時代の文脈とは、具体的には四十年代にクレンペラーをはじめとする研究者たちが取り組んでいた、ナチスによる言葉の濫用の問題である。この時期に発表された研究には前述のクレンペラーの『第三帝国の言葉 - ある文献学者のノート *LTI - Notizbuch eines Philologen*』やドルフ・シュテンルンベルガー、ゲルハルト・シュトルツ、W.E. ズースキントがまとめた論考『人でなしの辞書から *Aus dem Wörterbuch des Unmenschen*』が例としてあげられる。バッハマンがこれらの著作に触れていたかどうかは、本研究では突き止めることはできなかったが、引き続き書簡等に言及がないか調べていく。さらに遺稿の中にはいわゆる「言語批判」に関係する草稿が残されている。しかし注意すべきは、バッハマンは「言語批判」という用語を用いていないことだ。「言語批判」という観点は、あくまでバッハマン研究の中で語られている言説であることに注意しなくてはならない。四十年代の、ナチスによる言葉の濫用の研究とバッハマンの作品が連動していることは間違いないが、より丹念な文献資料の調査が必要である。

そして四十年代の一連の研究、とりわけクレンペラーがナチスの言葉の典型として着目するのが語句の反復なのである。バッハマンの詩にしばしば反復が用いられる背景には、このような歴史があるのではないかと考えることができる。たとえばバッハマンの詩『広告 *Reklame*』はナチスによる言葉の反復を強く連想させる。バッハマンの用いる反復はナチスによる、常套句に溢れた反復と異なり、複雑で豊かである。ナチスが重用した反復技法をあえて取り上げることで、反復技法を刷新し、本来あるべき反復の形とは何かを示したといえる。しかし補足すべきは、バッハマンの詩が持つ反復の効果は、ナチスの言葉とのかかわりで読み解かれるだけでなく、さらにリズムや音楽性とも結びついているのだ。バッハマンと音楽の密接なかかわりは研究史でもしばしば取り上げられてきた。バッハマンの詩の中には『主題と変奏 *Thema und Variation*』という詩もあるほどである。それから研究代表者がすでに『アクラガス川のほとりで *Am Akragas*』という詩について異文化接触研究会の研究発表で考察したように、反復は、「繰り返される歴史」という主題とも関連している。バッハマンの反復技法には多様な意味がこめられているのだ。

以上が本研究で得られた成果だが、最後に反省すべき点を以下にあげる。第一に遺稿の分析に比べれば、バッハマンのフランクフルト講義や同時代のクレンペラーの『第三帝国の言葉』についての分析が本研究では不十分であった。第二に、先にも述べたように、クレンペラーをはじめとする四十年代のいわゆる「言語批判」について、バッハマンが書簡等で言及しているかどうかを探し出すことができなかった。この二点を今後の課題として研究を深化させていきたい。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計1件)

Yuuki Kazaoka, Zum Einfluss der Medizin auf Ingeborg Bachmanns lyrisches Schaffen. Vier Gedichtfragmente, Medical Humanities-Tagung. Lyrik und Medizin, 2018年, ドイツ・ウルム.

各年度の実績報告書においても述べたが、ドイツ・ユダヤ研究会においてパウル・ツェランの詩について計5回発表を行った。各発表で扱った詩は『今日 *Heute*』、『ハンマーの頭をしたもの *Hammerköpfiges*』、『その蘭から *Von der Orchis her*』、『あちらこちらへぶつかった *Das umhergestoßene*』、『王の怒り *Königswut*』である。

〔図書〕(計1件)

Yuuki Kazaoka, Zum Einfluss der Medizin auf Ingeborg Bachmanns lyrisches Schaffen. Kommentar zum Gedichtfragment *Gloriastrasse*. 図書 Lyrik und Medizin の中に収録予定。出版社は Winter。2019 年に出版予定。編集中のため頁数は未定。

6. 研究組織

該当なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。